縄手町（なわてちょう）

往来の激しかった古代

土地区画の基準線となる「真っすぐな長い道」を、古代に縄手（なわて）といいました。おそらく地面に縄を長く引っ張って、区画線としたのでしょう。

縄手町の西に隣接する小房町の西側を、古代の区画整理（条里制）で「高市郡路東二十四条一里」の、基準道が南北に通っています。この道は、藤原京域の「西京極」とされる古代の大道「下ッ道」と重なり、北進して「横大路」と交差します。ここは古代、往来の激しい所でした。

県内には、縄添・縄掛・縄入などの小字名が一二〇か所も残っています。当初は、単に普通名詞だった「縄手」がいつか、この地を示す固有名詞に転じたのでしょう。縄手町の北で、ＪＲ畝傍駅東側に小字「小縄手」が残っているのも、ひとつの証明といえるようです。

明治一五年ごろの同地には、戸数が四七軒あり商家が六軒で残りが農業を営み（町村誌集）、米麦をはじめ綿にぶどうや葉タバコなどを栽培（農産物取調帳）していました。江戸時代の縄手村が明治二二年の町村合併で鴨公村の大字となり、昭和三一年の橿原市誕生に当たって「橿原市縄手町」となりました。